

相談室だより (みさき) 2013年11月

担当：みさき病院 MSW 福山



地域の歴史を知ることは、患者さんの生活史を知ること。

みなさんは50年前の『11月9日』が何の日かご存知でしょうか？古くから大牟田市周辺に住まれている方にとっては忘れることのできない日、三川坑の炭じん爆発事故の日です。普段いろいろな患者さんと接する機会があるのですが、これまで数名の方に三川坑の爆発事故で夫や兄弟を亡くした方と関わる機会があり、その時は「どんな事故だったのだろう？」と思いつつも聞き流していたので、これを機に自分なりに調べてみました。若い世代や最近大牟田に移住されたり職に就かれた方にはぜひ目を通していただきたいと思います。

三川鉱の爆発から50年

～記憶を風化させないために～



事故の概要

1963年11月9日15時12分事故発生。すさまじい「ドーン!!」という爆発音とともに死者458名、一酸化炭素中毒等による労災認定された方839名をだした戦後最悪の労災事故。原因は坑内のトロッコ列車の連結部が破断して暴走、その際に坑内に詰まっていた石炭の粉（炭じん）に引火して爆発が起こった。

周囲は爆風で建物の屋根や壁が吹き飛び、坑口周りには数百人の炭鉱マンや警察官がひしめいて怒号が飛び交っていた。全身がすすで真っ黒になった炭鉱マンを乗せた担架が次々に運び出され、遺体は市の体育館へ移された。

新聞での事実確認

私自身11月9日のニュースを見るまではこの事故の詳細を知りませんでした。縁あって大牟田で働くようになり、患者さんの



生活史を知るためにも是非知っておかねばと思い、翌日A社とB社の新聞記事を読み入るように見ました。

両新聞社とも一面で三川鉱の事故を取り上げ掲載していましたが、行政が式典に関わるのは初めてということで、「これまで何をしていたの?」と感じましたが、市の見解としては、「民間の事故なのでこれまで行政は関与しなかった」ということでした。A社とB社の記事を比較してA社の記事にあってB社の記事にないものに気づき、それは被災者団体の声でした。この追悼式典に参加した主要な方は大牟田市・荒尾市の市議会議員や商工会議所で作られた実行委員、行政、企業、遺族、患者で、被災者団体の主要な幹部は「今まで何もしてこなかった会社と行政が何を今さら…」と反発し参加せず、被災者からの代表挨拶もなく、別の場所で法要と抗議集会を実施しています。

全面的には、行政を中心に遺族や被災者に追悼を願い、この事故を教訓に二度と繰り返してはならないという内容でしたが、その裏側で、今でも事故と戦い続けている方々がいることを忘れてはなりません。

Cさん家族との面談

この記事を書こうと思ったものの、どうもテレビや新聞記事の内容だけでは、自分自身具体的なイメージがわかず、考えていたところ偶然にも入院中の患者様に遺族の方がおられ、遺族の妻のCさんとその娘さんに話を伺う機会ができましたので紹介します。

Cさん(女性)は現在90代で、事故当時は、社宅に住まれご主人が三井鉱山の機械操作の職種で勤務されていました。家族構成は、Cさん夫婦とそのお子さん3人(当時学生)の5人暮らし。勤務形態は3交代で、ご主人は昼の12時に出勤され夜中に帰宅される予定でした。ご主人との最後の思い出は、午前中に自宅建設予定地に石垣ができたので、ご主人に連れ出されてその土地を見に行ったのが最後の記憶だそうで、その後いつの間にか自転車で出勤していたということでした。

15時12分「ボン!!」という轟音と共に事故が発生し、娘さんは当時中学生で帰宅途中だったそうです。夕方になっても事故の詳細はわからず、具体的な情報が知られたのは夜のTVニュースやラジオで、ご主人の生存については不明で、同僚から「機械操作が役割のご主人は、坑道の入り口で働いているので無事ですよ」と励まされた思い出がCさんにはあるそうです。

結局、帰宅予定の深夜にも戻られず、き

っと事故の後処理に追われて帰れないのでは?と言い聞かせつつ一夜明け、翌朝念のために…と思い、当時高校生だった息子さんとともに訪れた遺体安置先の市の体育館で再会されたそうです。Cさんは状況が理解できず息子さんに連れられて帰宅したそうです。

葬儀は合同で行われ、三池闘争の影響もあり、祭壇が二つに分けられ、火葬は、一度にこれほど大勢の方を大牟田だけでは対応することができず、佐賀や長洲などそれぞれ遠方に行かれたそうです。

その後、遺族婦人への救済措置として、女性でも働きやすい縫製工場2社を誘致し優先的に働くことができたそうですが、もともと副業としてCさんは、和裁をされていたので、どうにか家計を維持することができ、「子供が無事に育ったことが誇り」と、娘さんの前でしきりにおっしゃられていました。

終わりに…。

今ある労働災害給付制度の礎は、最初からあったのではなく、こうした災害が契機となり、被災者や遺族が泣き寝入りせず戦った結果の大切な遺産です。若い世代の方々にとっては歴史の一部として認識されつつありますが、一方で被災者団体など今なお戦いつづけている方がいることを知ると同時に、私たちは語り継いでいく必要があります。

この事故で亡くなられた方の冥福を祈ります。



～編集後記～

この記事がほぼ完成したころ、達成感を感じつつもお礼もかねてCさんの病室に伺いました。お礼を伝えると「わたしゃいつ退院さるっとねー!」と一言(-_-)。一瞬にして自分の本業である退院支援にもどりました…。一期一会、その時出会った方とのエピソードを大切にこれからも楽しくし業務に励みたいと思います。Cさんご協力ありがとうございました。